

わかる喜びと、追求する楽しさをめざした算数授業のあり方 - 1年『ひきざん(2)』の実践より -

1、 テーマ設定の理由

一般に算数の授業では、指導計画の中に作業的・体験的な活動を位置づけ、算数の内容の系統を明らかにして、学習を連続させていくことが大切である。

子どもにとって楽しい授業とは「ああ、そうか。わかった。」とか、「僕にもできた。」という気持ちを十分味わうことができる授業であると考えます。また、課題に対して見通しを持って意欲的に追求していくことは、胸のわくわくするような充実感を味わい、自信と新たな関心を生み出すものと考え、このテーマを設定した。

2、 研究内容と実践

- 、重点化を図った単元指導計画
- 、ねらいにせまる算数的活動
- 、課題解決のために、追求意欲を継続させるための手立て

、重点化を図った単元指導計画

単元の目標を達成するために単元指導計画を作成するのだが、次の点について特に詳しく考え、1時間ごとの単元指導計画を完成させる。

ねらいの表現を細かく表す。

《指導書の第1時のねらい》
10いくつかから1位数をひいて、答えが1位数になる減法の計算のしかた(減加法)がわかる。

13-9の計算の仕方を具体物や半具体物を用いて考える活動を通して、13を10と3に分解し10から9をひき、残りの1と3をたして答えが4になる減加法の計算の仕方がわかる。

問題と課題を区別し、課題は子どもの言葉に近いものにする。

< 第5時 >

< 第6時 >

計画では

なぜ15-8になるのか
かんがえよう

13-6のしきになるおはなし
もんだいをつくらう

授業では

15-8になるのはどう
してだろう

おはなしもんだいをつくらう

4観点の項目のうち、その1時間でつきたい力をどこか1つに絞る。

第1時と第2時では減加法の計算原理をわからせるところである。子どもの実態から1時間では理解できないと考え、第1時は繰り下がりのあるブロック操作を意欲的にできること、第2時は違う問題で同じように操作を行い減加法について理解することができることに重点をおくことにした。1時間の授業の中で2つも3つもと望むのではなく、今日はこれ!というところを1つだけ絞って授業を仕組みたかった。

、ねらいにせまる算数的活動

- ・児童の実態に応じたもの
- ・1時間のねらいを確実に達成できるもの

このような算数的活動をいろいろ行った。第9時と第10時では新しい方法を取り入れ、次の3つの学習コーナーで計算練習を行った。

計算カードゲーム

同じもの集め～答えがおなじカードを集め並べる

大きさ比べ～無作為に選んだカードの答えの大きさを二人でくらべっこする

おいかけっこ～教科書問題 答えの大きさだけ進むことができるボードゲーム

パズルゲーム

ジグソーパズルと計算を組み合わせたものを作成した。計算問題を解き、答えと同じパズルのピースを選ぶ。そのピースを並び替えるとキャラクターの絵が完成するようになっている。

計算プリント

簡単で楽しいプリント(宝探し)と文章題のプリント(力だめし)を2種類用意した。

文章問題を自分で作るプリント(問題作り)。正しくできたかは教師でチェックした。

課題解決のために、追求意欲を継続させるための手立て

授業の最後まで意欲を持って取り組むことができるために、次のような学習環境を設定した。

場面に応じ役割分担を明確にしたT、T授業の実践

- コーナーの説明において、二人で行うゲームについて実際に演じてみせる。
- コーナー学習の場面では、T2は教室を離れワークスペースにて『パズルゲームコース』を受け持ち、T1は教室にてその他のコーナーを受け持ちそれぞれ指導・支援にあたる。
- 最後にそれぞれのコーナーでの子どもたちのがんばっていた様子を話す。



多くの学習内容の中から自分で選択できる学習コーナー
すべての学習コースをやってみたい問題からスタートし、
時間一杯いろいろなコースを挑戦することができた。

仲間と評価しながら進めることができる学習内容

- ・計算カードゲームの中に二人で行わないとできないコースがある。
- ・次のコーナーに移動する前に近くの友達にできたことを見せ、名前のサインをチェック表にもらうことをルールに取り入れた。

3、成果と課題

- ・ねらいの表現をできるだけ詳しくすること・問題と課題を区別し課題は子どもから出たものにする・4観点の中の1つに絞ることを意識し、単元指導計画を前もって用意しておくことはとても大切なことであることがわかった。時間がかかりなかなか詳しい単元指導計画を作成することは困難だが、他の単元もこの視点で指導計画を作成していつてみたい。
- ・興味関心を持って追求し続けるために、学習活動の中に自己決定させる場があり、自己評価・相互評価する場が位置づいていたことは有効な手立てであった。
- ・自己決定したものが子どもの実態に応じたものであったのか疑問に残った。子どもの中には具体物・半具体物から離れたため、指で数える子がいたり友達のやったものを見てそのまま真似をしている子もいたので、計算能力が高まった活動になったとはいえない。
- ・普段から、算数の言葉も含めた言語環境を整え、聞くこと・話すことをいつも大切にしたい。これは、算数科だけに限らずどの学習にもいえることである。1単位時間の中のどこかに位置づけるべきであった。